

Niche

[ニッチ]

棲み家を求めて—

no.10

- 2 | 分節を進める学校教育 ニッチを求めて [No.108]
西山 賢一
- 4 | この悪い時代に『黒い雨』を読む ❶
賀茂 昇
- 14 | アルメニアの旅 ❸
新名 哲明
- 17 | 日常雑感 1
出羽 丹後
- 18 | 装丁ぶらり散歩 ❶ 新書の装丁を見る
批評 Design
- 22 | 日常雑感 2
川手 直人
- 23 | 批評アングル
- 28 | 新刊案内
- 30 | 既刊案内

批評社



分節を進める学校教育

二ツチを求めて [No.108]
西山賢一

金融や政治をめぐる話題とならんで、教育が大きな話題になっています。有名幼稚園めぐつての確執、小中学校から高等学校にいたる学級崩壊、大学での学力低下と、盛り沢山です。どうも教育の場はいま、大きな混乱のなかにあるようです。なぜいまになって、こんなことになっているのでしょうか。教師の一員である私にも、深刻な問題です。

家庭ではいい子だったのに、学校に行きだしてから手に負えない子になってしまふ。学校に適應できないようになってきて、登校拒否から家庭内暴力に進んでいく。こうした事例がめずらしくないようです。

どうしてなのでしょう。短気な母親は、悪いのは学校だと決めつけます。学校が子供をダメにしてしまふ。確かにそうした面もありますが、ことはそう簡単ではありません。手がかりを得るために、あらためて家庭と学校を比べてみましょう。

家庭では子供を全体として扱います。子供の生活の全体がいつも目の前にあるので、丸ごと受け入れます。ところが学校では、子供を徹底して分節しよつとします。体操と算数と国語と

音楽といったように、小学校に入つてすぐに、子供の全体をまったく異なつた活動に分節していこつとします。体操が得意だけれど、算数はまったくダメな子供、算数だけ飛び抜けてできる子供、といった具合です。

家庭で全体として扱われていた子供が、学校でいろんなふりにかけられて、分節される。ここに家庭と学校の大きな違いがあるようです。分節された子供たちをながめると、白色の光をプリズムに当てたときいろんな色に分かれるように、みんな違つたスペクトルを持っています。生まれも育ちも違つので、子供たちはそれぞれに固有なのです。

ところがいつの頃からか、多様なスペクトルのうち、知識や学力だけが評価の物差になつてしまいました。極端な場合は、知能指数だけで子供たちを分類してしまおう、という発想になります。そして実は、この物差をもっともよく使つのが、学校の教師なのです。

しかし生物として生きていく面から見ると、知能というのは、多くの物差のうちのほんのひとつでしかありません。身

体の機敏さ、感覚の鋭さ、コミュニケーションの巧みさなど、たくさん要因が生きていくことと結びついています。

学校が知能だけを物差しにしてしまうと、子供の持つ豊かさが見えなくなるだけでなく、子供の欠陥もまた見えなくなってしまう。知能は高いのに、コミュニケーションができなかったり、身体の反応が鈍かったり、過敏だったり、音の識別ができなかったりというように、知能以外の面で欠陥がある場合も多いのですが、ともすると見過ごされたり、気がついて問題視されないことになってしまいます。

家庭内暴力の相談に乗っている友人の教師によると、家庭内暴力を起こす子供たちに、知能以外の面での欠陥がある場合が多いそうです。ところがそれに気がついて、精神科の病院にいつて詳しく診てもらおうことを子供の母親に助言しても、病院をやがる場合が多い。本当はいい子だし、知能も高いのだから、精神科の病院なんてとんでもない、というわけです。

そのつえ、マスコミや知識人といわれる人たちが、平等の大事を訴え、機会が均等であるべきことを主張するので、母親だけでなく教員までも、病院を拒否してしまいます。信頼のできない医者がたくさんいるのも確かですが、適切な病院ですみやかに診てもらって、適当な治療をすれば、簡単に直ってしまうのに、マスコミや知識人の良心的な発言がかえってその道を閉ざしている。「地獄への道は善意で敷き詰められてい

る」という格言を思い出してしまいます。

考えてみれば、子供たちにとって学校というのは、家庭とはまったく異なる、また危険なところなのです。いろんな教科を教わるのが、そのまま子供たちのあるがままの全体を、細かくチェックしていくことにつながります。これはちょうど、私たちが身体の様子を知るために、人間ドックに入って事細かに検査してもらうのと似ています。学校に通うということは、気がつかなかった欠陥が見つかってしまうことでもあるのです。学校に行かなければ、気がつかないまま一生を送れるかもしれないのに、学校に行つたために、生きるうえでそれほど問題にならない欠陥が明らかになる。知能というのもそのひとつなのでしょう。

学校という制度が進むほど、子供を検査する人間ドックとしての性能も進んできて、分節の精度がどんどん上がっていく。それなのに、学校の教師たちの対応は昔から変わらないまま、ひとつの物差しにこだわっている。どうもこの辺りに、いま教育が大きな問題になっている根本の原因がありそうです。高精度の分節の結果をどう扱うかは、機会をあらためて論じてみたいと思います。それにしてもまず変わらなくてはならないのは、教師なのです。

「悪い時代に 『黒い雨』を読む」

1 「戦前」の光景

悪い時代になった。今の世の中、なんだか戦前という気がしてならない。

日米防衛協力のための新しい指針、いわゆる新ガイドライン法の成立、捜査機関による電話等の盗聴を認める通信傍受法案の衆院可決、活動を再開したオウム真理教の封じ込め絡みで破防法まがいの法律制定を唱える動きの再浮上、日の丸・君が代の法制化……。

少し前なら、とても通りそうもなかった公権力による無理無体が、「危機管理」の名目のもと、べつだん強権による強制力が発動されているわけでもないのに、いとも簡単に公認されていく、あるいは公認されつつある（一九九九年七月五日現在）。

閑居して甚だ世事に疎く、世間を極めて狭くして生きている愚生がその日常身辺を見渡したかぎりでも、これら一連の不穏な動きに、世間はさほど緊張しているようには見えない。

ハラに応えたような顔つきをしている者が至って少ない。そう遠くない将来、剥き出しの権力の前に晒されるときが来るか

第一回

賀茂昇

もしれないというのに、不安そうな表情をしている者になかなか出会えない。人殺しに加担することになるかもしれないのに、いや殺されることだってありうるかもしれないのに、暗い予感におびえることのできる、まっとうな感受性を具えた者の息づかいを周囲からほとんど感じ取れない。

今年（一九九九年）のゴールデンウィークの海外旅行者数の多さはこの不況にもかかわらず記録的だったとか。いっぽうで、中高年男性の自殺者数が戦後最悪を記録した。自殺の動機は経済上の不如意が圧倒的に多いとのことである。

かかる異常事態を尻目に、テレビでは、新型パソコン購入やハワイ旅行、グルメ旅行を家族や恋人からせがまれた年齢の頃三十前後とおぼしき男が、身内の要望をソデにして新車を買換えるという図のコマーシャルが頻繁に流されている（これも一九九九年七月現在）。例によって、戦後最悪の記録を更新中の交通戦争、排ガス公害などの非常事態など微塵も感じさせない、家族ドライブの、テレビの画面でしかお目にかかれぬオキマリ

の悠々とした架空の情景、画面の人物はしゃあしゃあと次ぎは

ハワイだね、などと言っている。

自殺を覚悟して、遭された家族のために役に立てばと生命保険に加入する中高年男がこのコマーシャルを見たら、いったい何を感じるか。

自殺と交通事故死だけでも、年間で約五万人近い数の死者が出ている。この国はいま、抜き差しならぬ内戦状態にあるわけではない。なのに、アフリカの紛争国並みの死人の数である。しかし、不況、不況と言いながら、ここは依然として、アフリカ諸国から見たら想像もつかないほどの大消費天国でもある。何なのだろう、この凄まじいまでのアンバランスは？ 何とも歪で異様な眺めではないか。

狂った超消費享楽追求社会は、ついに行き着くところまで行った、という感がある。とにかく、臭いものにはフタ、フタ、フタで徹底的に押し通し、いつ自分たちが見舞われるかも知れぬ蓋然性の高い不幸など、ボクたち、アタシたちにはゼツタイ無縁だという意識を消費者に植えつけることに、テレビ屋、宣伝屋、クルマ屋は相変わらず余念がない。まさしく犯罪的だ。全国津々浦々に社会情勢不感症のウィルスをばらまいているようなものではないか。マイカー、マイホームという言葉に象徴される強固な市民エゴ。自分たちだけの閉ざされた享楽へのおそろしいまでの執着。オレらだけ楽しみめりゃ、どこのオッサンが鉄路に飛び込もうが首を括ろつがゼンゼン知ったことじゃな

い、えっ、それってどこの国のハナシ、ということらしい。人の不幸に涙を流せる能力のある者など皆無に近いのではと、ほとんど絶望的な気分にはさせられる今日この頃である。

節操のないコマーシャルが多すぎて厭で厭でたまらないので、1チャンネルに変えてみる。この局も最近やたらと、やれ衛星放送だ、やれハイビジョンだと自分たちのPRに懸命だ。民放並みにマスコットを使ってコードモ（並みのアタマしか持ち合わせていないオトナ）の関心を惹こうとしているのがミエミエだ。そのキャラクター商品さえ出回っているような始末である。僕たちが支払っている受信料の使途が気になるどころだ。

さて、画面には二人の男性が深刻な面持ちで対峙していた。エイスウィルスに汚染された非加熱の輸入血液製剤を行政指導で回収することを故意に怠り、血友病者の被る致死的な被害より、クスリ屋が抱えることになろうと莫大な経済的損失を食い止めることを選んだ厚生省の元担当課長が、番組の中で、被害者の青年から面と向かってその非を責められていた。

この元官僚の答えがふるっている。曰く、企業の利益追求を否定する社会に我々は生きていくわけではないですよ。

正常な利益追求活動と異常なそれとの見境が、どうやらこの御仁にはつかなくなっているようだ。この元課長さん、生き馬の目を抜くこの世の中で、他を出し抜いて利益を上げる（つまりそれで出世する）ためには、人死にがあつて当たり前とでも

思っているのかも知れない。ことほど左様に、経済至上主義が、この社会のエスタブリッシュメントのあるがなきかの貧寒とした良心を麻痺させている。

こつした類廃した世相の中で、新ガイドライン法は難なく成立した。寒心に耐えない。

そもそも、この法案が両院を通過するまでの過程が異様だった。その経過を追ってみよう（以下の叙述は、『世界』一九九九年四月号と『朝日新聞』朝刊一九九九年四月二八日付東京本社版に拠る）。

九六年に合意をみた「日米安全保障共同宣言」の内容から、旧ガイドラインの見直しが明らかになった（つまり、日米安保が、これまでの二国間を対象にしたものから、広くアジア太平洋地域に移った）時点で、新ガイドライン法制定への枠組み作りが、事務レベル協議を経ただけで既成事実化された。これこそ実質的に安保改定という憲政上の最重要事項であったにもかかわらず、議会はカヤの外におかれ、主要マスコミはそのほとんどが関心を払わず、そのため世論はほとんど盛り上がりがなかった。

九五年の沖縄米軍基地の米兵らによる日本人少女レイプ事件に端を発して、安保見直し、米軍基地撤去の運動が高揚したものの、それも一時の興奮に終わり、北朝鮮脅威をある一連のキャンペーン（核兵器疑惑、日本人拉致事件、ミサイル（？）

発射事件）がマスコミを賑わすと、にわかに危機管理、有事体制強化の必要を叫ぶ声がヒステリックに高まった。このため、上記の実質的安保改定に関する国民的議論を冷静に喚起しようとする一部の意思はかき消されるかたちとなった。

権力サイドのゴリ押しと、マスコミ・国民一般の無関心、「戦争論」とかいっまんがに乗せられた若者たちの意外な数、これらが連動する恰好になって、至極アイマイなまま、実質的安保改定が、まさになし崩し的にスムーズになされた。六十年安保のときに比べて、国民は実に冷静に、かつ賢明に事態に対処した。これが為政者側のムシのよい見当外れの評価である。とにかく、憲法九条改正まであと一步のところまで来てしまった。

自民、自由、公明三党が提出した共同修正案によれば、「周辺事態」の定義は、何ら地理的概念を含んでないのだそうだ。アメリカの東アジア戦略にとって、外交面のほか軍事行動面でも対処しなければならない「脅威」とは、現在のところ、北朝鮮と「台湾問題」を抱えた中国である。今度のガイドライン法案が日米安保条約を効果的に運用することを謳っている以上、中国その他の国は、日本の軍隊がアメリカの軍事行動の一翼を担つものと同警戒しても無理はない。その警戒心を和らげるため、そして、台湾問題は中国の国内問題とした先の日中共同声明と、米の東アジア戦略への同調との矛盾をこまかすため、ワケのわからぬ「周辺事態」なる造語をテッチ上げたわけだ。

修正案によると、「日本の支援は後方地域で行うから安全」なのだそうだ。しかも武力行使に至るわけがないから憲法違反にはならないらしい。

この「後方」といっものは、つまるところ、人員、物資の補給傷兵への医療活動などの役割を果たす「兵站」のこと。こいつをアメリカにとつての敵国が戦略上の必要から叩いても国際法違反にはならない。したがって、いざ戦争になったら、相手はいくらでも攻撃を仕掛けてくることは眼に見えている。それが、どうして「安全」なのか、さっぱりワケがわからない。

また、戦争放棄の第九条の拡大解釈・運用が情性化した結果として、「専守防衛」がなかば世論の「常識」となり、自衛隊法の改正、悪解釈の結果、防衛のための必要最小限度の武器の使用は武力行使に当たらないとする政府統一見解がまかりとおってしまっている現在、「武力行使に至るわけがない」事態など考えられない。相手側の攻撃に対して、「後方支援」の任に当たっている自衛隊は火器を使って何とか防戦しようとするにきまっている。

このたびの日米安保改定で、作戦行動をとる米軍と自衛隊に、民間と自治体は「協力」しなければならないことになった。つまり、米軍の武器弾薬を輸送している業者、使用可能性の高い全国の港湾・空港、ならびにそこで働く作業員、病院（朝鮮有事の際負傷した米兵の治療のための）等の徴用・接収が意のまま

まに行われる次第となった。

政府は、違反しても罰則規定を伴ったところの「義務」ではなく、あくまで「協力依頼」にすぎないから強制力はないとしているが、国家との友好関係を保ちたいのならムゲに断れるはずがないとか、補助金で従わせるまでだと、強硬姿勢を隠していないということだ。

新ガイドライン法案の原案では、周辺事態に際しての必要および対応措置に関する基本計画の国会承認は不要で、事後報告でよいとされていた。しかし、その後、公明党の要求を入れ、「自衛隊の出動部分を国会承認としたが、『原則事前、緊急時事後』と幅をもたせた」（『朝日新聞』四月二十八日付朝刊）。

緊急時の何たるかが定義されていないため、「いろいろな理屈をつけて『緊急時』と言つ可能性が残」（同上）った。いずれにせよ、現場の情勢、その時点での国会の勢力関係で、自衛隊の行動に融通性を与える可能性が出てきたのは確かだし、また、作戦行動の主力たる米軍の日本国内での動きを牽制できないことには変わりはない。

このように国会の統制力が無に等しくなりつつある情勢は、じつは今日に始まったことではない。PKO協力法（一九九二年）は、協力活動の内容結果等を内閣総理大臣が国会に報告するに際して事後報告でよいとしているし、国際緊急援助隊派遣法（一九九二年）は、「国際緊急援助活動」（自衛隊法）一 条

の六、一九九二年追加)に際して、自衛隊に国会への報告義務を課していない(古関彰一「国会報告・国会承認」『世界』一九九九年四月号)「周辺事態法をめぐるキー概念」に拠る。

右寄りの者はもとより、いわゆる「現実主義者」たちは、現在の日米の協調関係を異議申立を唱える以上、なんらかの具体的な対案を示せと言つに違いない。しかし、待つていただきたい。無力な一市井人にすぎない愚生が、そんな提案など示せるはずがない。

問題をすり替えないでいただきたい。要は、愚生のような者でも、きわめて間接的に参加しているはずの議会政治のありようが、今度のガイドライン問題で徹底的に蔑ろにされている。目下ますます問題にしたいのは、そのことなのである。

繰り返す。新ガイドライン法は、近い将来、憲法改正にも繋がりがかねない安保改定という大問題である。それにあたって、政府・与党は、衆議院を解散して民意を問うことすらしなかった。公明党に至つては、いま総選挙をされては勝ち目がないからという理由で、この法案を取引に利用した。国民も国民である。自らの意思表示の場がないわけではなかった。今年春の統一地方選がその絶好の機会だった。

さる二月三日、高知県の橋本知事は県議会に、非核港湾条例案と県内に寄港する外国艦船に非核証明書を求める運用要綱案を提出した。政府は、国防問題に一自治体が口出しするなと

不快感をあらわにし、自民党県議連に指示して橋本知事案を葬った。新ガイドライン法の障害になるものは全て排除するという姿勢がミエミエだった。

人員、土地、物資の強制徴用・収容はまさに人権と地方自治に関わる事柄である。そのことを憂えての自治体首長のプロテストを国権を力サにはね除けた政府自民党の姿勢に、国民は明日の日本の姿を想像してみるべきだった。国権を前に地方自治など二の次なのかと、中央政府・政権与党に文句をつける機会が先の統一地方選挙戦だったのだ。

しかし、抗議の声はか細かった。新ガイドライン法を推進する党派は敗北しなかった。

大メディアの最近の世論調査によると、現職総理にたいする支持率は高い(一九九九年七月現在)。支持する理由はと問われて、多く挙げられた回答は次の通り。曰く、あの人物に何となく好感が持てるから。

僕たちは、こつこつ、おそろしく想像力を欠いた時代に生きている。政治的無関心に骨がらみになった風土の中で相も変わらず、閉じたまま暮らしている。

先般、NATOによる旧ユーゴ空爆が連日報道され、戦争の惨禍が伝わってきた。この国のほとんどの民草はどこ吹く風、自分の国でも有事体制が着々と進められているというのに、それを意にも介さない悠長さを示した。

前置きが非常に長くなったが、以上述べてきた現状を踏まえて改めて読みなおしてみると、僕たちの実相を鮮明に映し出している小説がある。それは、政治的無関心や非(反)政治的气氛および体質が現代日本の奇妙な国民性あるいは国民感情になっていることを読み手に伝えてくれている。これから述べる事柄は、その確認の作業である。

2 遠慮がちな反戦観

井伏鱒二の『黒い雨』を読んでいて、たいへん気にかかることがある。著者自身、小説でなくドキュメントと呼ぶこの作品にふれて、読者は、原爆投下とそれにまつわる政治の問題に関して、ものの奥を見る目を養つことができるだろうか。その点、どうも心許ないと僕は考える。

これも原爆を主題にしている佐多稲子の小説『樹影』と読み比べると、その感がいつそう強まる。その「原爆観」を頼りないものとして『黒い雨』に非を鳴らさざるえなくなる。

米国側の原爆投下決定にいたる政治過程と、その後アメリカ社会に流通した原爆使用正当化の「論理」を知れば、『黒い雨』の出来はもの足りないのだ。戦争を政治悪あるいは国家悪の結果として捉える視点をぼかし、その最悪の産物であるところの原爆投下という事態を、あたかも天災であるかのように、読者に錯覚させてしまいかねない濃い印象を与えているから。

世の中には、この墮行に対する淡白すぎる批判的態度を、『黒い雨』の取り柄として歓迎する向きがある。発表時に書かれた大新聞の書評(『朝日新聞』朝刊「読書」欄、一九六六年十一月八日付)とか、文庫本の「解説」(新潮文庫版『黒い雨』所収、河上徹太郎『黒い雨』について)、文芸誌掲載の評論(『文学界』一九七八年三月号所収、饗庭孝男「自然と人為 伏鱒二論」)がそれだ。

こつした批評が書かれることじたい、『黒い雨』の弱さなのだとい僕は考える。

『黒い雨』のなかには、何人かの作中人物たちの口から出るといつかたちで、反(非)戦の意思が示されている。そうした例を幾つか拾って以下に挙げてみよう。たとえば、主人公の間重松の言葉に耳を傾けてみると

一、重松の家の近所に松本さんという左翼学者が住んでいた。アメリカの大学を卒業したこの人物は憲兵隊から目を付けられていた。いつでも疎開できる身でありながら松本さんは、スパイだと疑われることを警戒して、町内の世話ばかり焼いていた。そればかりではない。市や県の役人、警防団員に対しても相当気を遣っていた。そんな姿を見て、重松は養女にしている姪の矢須子にこつ言つ、「松本さんが役人の前でちやちやするのはい、世の中が狂っておるからだ。」

二、横川駅で被爆した後しばらくして、衝撃から何とか立ち直り、構内のとこざとこざに幾つも散乱した弁当箱の中身を見た

重松は、次のような厭戦の言葉を口にす。「あそこに転がっている、あの弁当を敵がみてくれないかなあ。あの握り飯を見たら、敵はもう空襲に來なくてもいいと思うだろう。もうこれ以上の無駄ごと、止めにしてくれんなあ。僕らの気持、わかってくれんなあ。」

三、「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもよい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい。」

また、重松の妻、シゲ子は、自分の手記を「戦争というものは、老若男女を颯り殺しにするものだということがよく分かりました。」と記して結び、矢須子は八月七日の日記に「累々たる死骸は、無言の非戦論」と書き留めている。

しかし、こうした戦争に対する非難、呪詛の言葉はどこか控えて弱々しい。芯が一本通っていない感じがする。それは次の事柄からも明らかだろう。

やっとの思いで勤め先の工場に難を逃れて來た重松は、大東亜共栄圏の「理想」を揶揄する同僚を「そんな敗戦気分を出す噂は、伏せて置いてくれたまえ」とたしなめるのだ。

反戦、非戦、厭戦の言葉が遠慮がちに聞こえるのは、言論統制令に怯えながら、それが発せられているからだという点をもちろん考慮に入れなければならないだろう。

こつこつ件りある。

重松が勤務している工場の中で、彼を含めた幾人かの従業員

たちが、戦争の行く末に対する不安を口に出している場面。

「それにしてもピカドンが落ちる前に降伏することは出来なかったのか。いや、ピカドンが落ちたから降伏することになったのだ。しかし、もう負けていることは敵にも分かっていった筈だ。ピカドンを落とす必要はなかっただろう。いずれにしても今度の戦争を起す組織を拵えた人たちは：／＼話はもう言論統制に逸脱するところまで行ったので、それ以上に臆測は進展しなかった。」

『黒い雨』の語りは、閑間重松を中心にした何人かの庶民が戦中したためておいた記録がベースになっている。だから、登場人物たちの口にする反(非)戦の意思が、言論統制令の範囲を越え得ない、愚痴っぽいヒソヒソ話とか、か細い独り言のようなものにならないのは、時代的制約上当然だということも、ある程度は理解できる。

しかし、小説の時代背景が戦後に移り変わっても、『黒い雨』には、戦争犯罪を指弾し、この政治悪の原因を追及していくこととする姿勢が窺えない。

もちろん、これがドキュメントタッチの小説である以上、もしかししたら、米占領軍統治下での検閲や言論統制のことを考慮しなければならぬのかも知れないが、なにもそこまで厳密に考える必要があるだろうか。登場人物たちのさまざま「声」を、『黒い雨』の発表時点の(あるいはそれ以後)の日本人一

般の意識にダブらせてもいいと思う。

ちなみに、言論統制令の網が戦時中の庶民生活の隅々まで張り巡らされていたことは、シグ子の手記にある次の記載から窺うことができる。

主食の米麦の配給が一人当たり一日量三合くらいに減らされた頃、隣組の宮地さんの奥さんがその筋に呼び出されて、厳しく叱責された。

この奥さんは、農家に食料を買い出しに行く途中、電車の中で隣り合わせた人に向かって、配給米が三合になったので、子供の教科書に載っている詩（宮沢賢治の「雨二毛負ケズ…」の文句が「一日二玄米四合ト…」となっていたのを、「一日二玄米三合ト…」に改悪されたと話した。

また、こうした書き換えをするのは、「曲学阿世の徒のすることです。子供がこの事実を知ったら、（中略）おそらく、学校で教わる日本歴史も信じなくなることでしょう」とも言った。これが官の耳に入ってしまう、その筋の役人から宮地さんの奥さんは、国家総動員法にも抵触しかねない流言飛語を流すつもりかとサンザン脅かされた。

この頃から、「誰も人前に出たときには言葉に気をつけるようになつて」いたと閉間シゲ子は書いています。

ここで誤解のないように言っておきたい。作中人物のみせる反戦の意思や感情が控えめであるからといって、僕はなにも

彼らの怯懦をそしりたいのでも、罵りたいのでもない。ただ、こうした抑え気味の告発の調子が、国家や政治の責任について根気よく考えていこうとする姿勢を醸かせることになりはしないか、と危ぶんでいるだけだ。

事実、ヒロシマ、ナガサキの惨事の責めを負うべき者など、あたかも存在しないかのような言論がある。その典型が冒頭に挙げた三つの批評なのである。『朝日』の無署名書評は『黒い雨』を、戦後二十年にして「やっと生まれた国民文学」と呼んで褒めちぎっている。

文脈から察するところ、被爆体験をモチーフにして、それが「国民文学」と呼ぶ作品に仕上がるかどうかは、どうやら次のような条件に適う必要があるらしい。その条件とは、「肩肘を怒らせて、何らかの主張をたたきつけ」ないこと。「大声はり上げて、だれかを責め立て」ずに、「しずかに描くこと」。

この理屈からすると、怒髪天を突かんばかりに激怒しながら、被爆の苦しみを我が身に強いた日米の為政者たちの罪を、手記や手紙の中で、あるいは詩や小説というかたちで呪った被爆者の証言など、一部の者にしか通用しない限られた声にすぎず、問題外といふことになるだろう。

つまり、この書評子が言いたいことは、こういふことなのだ。己の政治上の旗幟を鮮明にして、国家悪を告発するような、あるいは、戦争犯罪を高らかに指弾するようなマネをしな

いことこそ、「国民」といつ言葉を超するに相応しい著作（もしくは意思表明）の態度なのだ。」と。

新潮文庫版『黒い雨』の解説者は、被爆に係する政治議論を回避する点で、いっそう露骨である。

この解説によれば、当作の成功は、作中に出てくる庶民それぞれが被爆後一朝にして犠牲者でございと気負い立ち、今までは別人格になって、戦争の政治上、道徳上の非理を糾弾しなかつた点に由来するといふ。

平常心をけつして失わぬまま、受け身でこの艱難辛苦を忍び続けている健気な姿勢こそ、彼らの個性を際立たせ、読者の義憤をそそのかすのだとも言っている。

この小説が痛烈な戦争呪詛であるのはもちろんだが、一面と向かつて反戦をわめきたてているのではないとして、この解説者は次のような意味不明の「反戦観」を披露している。『黒い雨』は、黙々と戦争に『協力』しながらその犠牲になっている民衆に対する無言のいたわりから出来ている。だからこそそこに真実の戦争への抵抗が生まれるのだ。」

（準）戦争政策の是非についてことさら言挙げせず、これを不問に付したままであることが、従順な犠牲者に対する「いたわり」となり、そこから「真実の戦争への抵抗が生まれる」となどと、まかり間違つてもありえない。たとえば、適切な情報公開がなされなければ、あとになってヒドイ目にあつのは、何

も知らされてなかつた庶民だといふことは、戦争にとどまらず、薬害事件のケースなどからもわかる。この解説者の議論のデータメスは、米国内での核爆発実験による庶民の受難を見たら、よりはつきりするだろう。

のちに触れるが、原爆投下を行った戦争犯罪国たるアメリカでは、一九九四年から九五年にかけて「スミソニアン論争」が起こるまで、国民的規模で幅広く、しかも継続的にヒロシマ、ナガサキに対する戦争責任を論議することなどなかつた。

政府とその尻馬に乗つたマスメディアの巧妙な情報操作によつて、事実を知らされていない国民は、原爆投下を正当化する権力側の公式見解をそのまま鵜呑みにした。

ヒロシマ、ナガサキを直視しないことは、自国の核兵器体制を容認することにつながつていった。核兵器に対して、多くの国民が無感覚になつていったのも当然だった。つまり、黙々と国策に協力していたわけだ。

数多く行われた核爆発実験により、国内だけでも恐るべき数の「ヒバクシャ」が発生していたにもかかわらず、多くのアメリカ国民はその事実を知らされないままだった。

したがって、自国民をも犠牲にしながら非情な核政策を堅持し続ける体制側に対して、言挙げしようとする者など出て来ようはずもなく、出て来てもそれはごく少数だったから、その発言は社会の隅々まで行き渡ることがなかつた。

かくて誰もが無知と沈黙の状態におかれていたから、つまり、結果的に権力にとって御しやすい存在だったから、核兵器ノー！ という真の抵抗も生まれようがなかったのである。その間、放射能による犠牲者はいたずらに増えてゆくばかりだった。

この一事を見て、新潮文庫版『黒い雨』の解説者が実に無責任なホラを吹いていることがわかる。版元は一日も早くこの解説を削除すべきである。

さて、あと一つ、『文学界』に載った井伏鱒二論について検討してみたい。『黒い雨』で作者は、価値判断と感傷とを出来るだけ抑えた客観描写を採用して被害の実相をなるべくありのままに伝えることで、この未曾有の惨禍をもたらした悪を告発しようとした、と巷間ではいわれているらしい。しかし、この批評を読むと、そうではなさそうである。

この「自然と人為」という批評文を読んで知ったことだが、井伏の初期の作品に「炭鉱地帯病院」という、女中に行った娘を手込めにされて失う老人の話¹があつて、その中に「こういう箇所が出てくるという。

「社会の制度といつものは大地と同じく動かすべからざるものです。若し私が種種なる問題を言詮してそれを社会の問題とするならば、私なる人間は制度に対して喧嘩をしむけるといつものです。しかし私は、いかなる場合にも喧嘩は好みません。私

達は不幸といつものに慣れています。ただただ私達は、不幸が私達にむかつて色彩強く押し寄せて来た時には、能つる限り嘆けばよろしい。ラメンティシヨンのみが私達に与えられた自由です」(原文旧仮名遣い)

井伏論の筆者によれば、この箇所は、井伏文学の示す、人生に対する基本的な態度の一つなのだそうだ。またこの言葉は、『黒い雨』のなかに出てくる「むしろは、国家のない国に生まれたかったのう」という悲嘆(ラメンティシヨンの)の声と響き合っているのだそうである。

なるほど、そう言われてみると、僕には「炭鉱地帯病院」のこの箇所が『黒い雨』のなかの科白のように聞こえてくる。この初期作品でいわれている「社会の制度」とは、言論統制令でもあり、原爆を開発、使用した国家制度ともとれる。

現実に国家という制度を離れて生きていくことができない以上、人はただこのように嘆くほかない。人間が制度を動かしているのではなく、制度が人を翻弄しているのだ。

このように、人は制度(運命)に対してなす術を持たないのだという悲しみを、「炭鉱地帯病院」同様、『黒い雨』も湛えている。これを執筆した時、作者は「人間の営みの原理的なところまで下りてい」た。こうした根源的な場所に立つてしまった作家にとって、もはや政治悪を告発することは本質的なことではない。

アルメニアの旅

夫を日本に売りたい!?

アルメニアに滞在中、日本の物価が話題になることが多かった。ドルやルーブルに換算して例をあげると、彼らは一様に、その途方もない高さに驚嘆した。

また彼らは、日本人の収入にも大きな興味を示した。

ローラの姉のアナイダを訪ねたときのことだ。私は質問されるままに、月収が二〇〇〇ドル程度(二〇万円少々)だと話した。するとローラが真面目に尋ねた。

「夫のペトロスは日本で働けないかしら?」

二〇〇〇ドルといえば、ペトロス一家の年収の一、五倍に相当する。日本では二〇万円の月収なんて低い方だが、アルメニア人にとっては、とんでもない大金なのだ。

ローラは、夫が電気技師であることを説明して、日本での就職の可能性を本気で知っていた。

私は、言葉の問題や習慣の違いなどを理由に、それは無理だろうと返事をした。ただし、日本に外国人労働者が大勢いることは正直に話した。そして彼らが主に単純労働に就いて、お金

第九回

日本アルメニア友好協会会員

新名 哲明

を貯めて故国に帰っていくということも。

するとローラが言った。

「道掃除くらいなら夫にもできるわ。それでもだめ?」

当時、多くの外国人労働者は、肉体労働でひどい扱いを受けていた。そういう状況を知っていた私は返答に困った。

仕方なく、ペトロスが四〇歳を超えていることをあげて、「若くないからダメですよ」と答えた。ローラは大変がっかりした。

そのとき、ローラの姉のアナイダが言った。

「じゃあ、亭主を日本に売ってしまつわ。どつ?」

座は大爆笑となった。そしてローラも、自分の夫を日本に売ると言い出した。

自分の妻から「日本に売る」と言われた亭主たちは、うつむき加減でそれを聞いているのだった。

「口」では妻が勝つ

ローラたちの言葉は、もちろん冗談である。しかし、必ずし

も全部が冗談とはいえない。

いま、ローラの夫のペトロスは失業中である。ジャガイモ畑の重要な労働力ではあるものの、定収入のない状態だ。

ペトロスは畑に行かないとき、いつも家にいる。家にも何もかを手伝うわけではない。要するにローラにとっては粗大ゴミなのである。日本で稼いでくれれば、それに越したことはないのだ。

家の中の仕事は、すべてローラが仕切っている。またアルメニアの伝統として、一家の家計も妻のローラが握っている。ペトロスは、ローラにおねだりをして小遣いをもちろっているという。

ローラとペトロスはよく言い合いをする。この言い合いでは、両方とも声が非常に大きくなる。

一般にアルメニア人は議論好きで、私を親戚の家に連れていったときも、議論に夢中になると大声になり、私の存在を忘れて



妻たちに「日本に売る」と言われてしまった亭主たち。



親戚が集まればアルメニアダンスで大さわぎ。

しまうのだ。その激しさは、「ケンカが始まったのか?」とびりくりするほどで、ときどきローラは、「私たちって声が大きいでしょ?」でもケンカをしているわけじゃないのよ」と気づかってくれる。

ローラとペトロスの場合も、「ケンカ」という類のものではない。だが、この二人の言い合いのとき、ほとんどの場合はローラが言い勝ってしまうのである。そもそも気迫からしてローラのほうがすごい。亭主であるペトロスを完全に呑みこんでいる。料理・洗濯・掃除といった実務をこなし、サイフのヒモも完全に握っているローラ。

そして夫には収入がない。こんなとき妻の方には、「この家は自分が切り盛りしているんだ」という自信が生まれるだろう。



妻のローラと、でっぷり太ってしまったベトロス。

実生活を取り仕切っているローラに、生活者としての説得力が備わって、ベトロスは、とてもじゃないが齒が立たないでいるわけだ。

アルメニアに到着した日、私はベトロスからアルバムを見せてもらった。そこには子供時代からのベトロスの写真がたくさんあった。しかし若い頃の写真を見たとき、私は思わず「これは誰?」と尋ねてしまった。

二〇代のベトロスは、信じられないくらいにハンサムなのだ。大きくてエキゾチックな目。ナイフで削ぎ落としたような鋭い顔のライン。日本でも絶対にモテる顔である。

ところが、いまのベトロスには昔の面影は少しもない。頭は

真ん中が禿げあがり、お腹もずいぶん出ている。ああ、ありし日のベトロス、いまいず」……。

失業中で収入のない亭主は、女房子供に対してめつきり弱くなるのか。アゼルバイジャンの経済封鎖は、少なくともアルメニアの男たちを弱体化することには成功しているようだ。

「日本人」ということ

アルメニア滞在の最後の日、ローラは私にこう語った。

「私たちはね、日本人ってどういう人間なんだろうと想像していたの。だからあなたの来るのを楽しみにしていたのよ。そしていま私たちは、あなたを通して日本と日本人がよくわかったわ」

この言葉を聞いて、私は大いに考えさせられた。ローラたちにとって、私は「個人」ではなく「日本人の代表」なのである。つまり私の言動はすべて、日本人の言動として映っていたわけだ。しかし、こういった見方は私たちにも当てはまるだろう。たとえば近所にフランス人が住んでいれば、その人の振る舞いに対して私たちは、「あの　　さんは……」ではなく、「あのフランス人は……」と考えてしまったらどう?

海外に出たとき、相手の国の人たちは、私たちを「個人」とは見てくれない場合が多そうだ。好むと好まざるとにかかわらず、海外では、私たち一人ひとりが「日本人」をいつも代表しているのである。

【日常雑感】 その一 出羽丹後

「ブッチホン」なる言葉が流行語に選ばれ脱力も甚だしい一九九九年末、田中紀子著『農聖石川理紀之助の生涯（批評社）』を読む。まだ電話もない明治時代、日本各地を歩きながら農業改善の方法を指導し、多くの村を疲弊の底から救った農聖の話に、ただただ頭が下がる思いである。

石川理紀之助は秋田県金足村の生まれで、秋田県庁にも勤務、大正四年に亡くなっているのだが、彼が六六歳の明治四一年、東京のジャーナリストが大挙して秋田を訪れたことがあった。当時『実業之日本』編集顧問であった新渡戸稲造をはじめ、『都新聞』の中里介山『毎日電報』の小野無子他、錚々たる顔ぶれの人々である。彼らは秋田の産業や名物などについて、なかなか鋭い観察眼を向けていることが、その報告集『知られたる秋田』からうかがい知ることが出来る。その中でも、多くの記者が「秋田美人」という項目を設けて、秋田県内各地の女性の印象を比較したり、「色



秋田美人（『知られたる秋田』口絵より）

白面長で、鼻の角度が頗る整頓される程美人が多いが、ただ気品が乏しい」などと大真面目に書いている点は笑いを誘う。

とここで同時期の大阪朝日新聞には、内藤湖南の筆による徳島訪問の所感談が掲載されている。そこには「徳島は美人系に當って土地の婦人は皆垢抜がして居る但し婦人の美しい土地は今の日本では政治上餘り勢力のない處が多い京阪愛知廣島新潟秋田の如き其適例である徳島も其選に漏れず現今の振はざる有様である云々」とある。この所感に對して秋田を訪問した『東京朝日新聞』記者岡野告天子は、その「根拠」が示されていないと前置きしておきながら、自分も根拠を示すことなく、『知られたる秋田』紙上で「僕は美人を産する處は必ず經濟界に勢力を占むるの土地なることを斷言する」と対抗しているのが面白い。

岡野記者の報告は「美人を以て鳴る秋田縣も將來は大に政治上に勢力を張る時が来ることであらう。此點に於て京阪人たる僕と秋田人とは利害休戚を共にするものである、秋田美人萬歳！」と締めくくられており、随分とまあ脳天気な総括である。しかしながら美人多き土地（實際その定義もあやふやだが…）と政治的な勢力の関係というのは興味をかき立てられるテーマではある。私の住む昨今の東京では「ガングロ」な「コギャル」（もはや死語か？）が幅をきかせているようだが、小淵「鈍牛」政権と無関係ではない気がしてくるのが不思議だ。

*引用部分は、『知られたる秋田』瀧澤武編、発行／明治四一年刊より。



『農聖石川理紀之助の生涯』

装丁ぶらり散歩

新書ブームだそうである。いつもは『週刊プレイボーイ』の広告の広末涼子嬢や『週刊少年ジャンプ』のキャラが道行く人々を見下ろしている集英社の看板も、創刊！集英社新書の「コピーと共に、何やらキザなオトコがポーズをつけている。後から知ったのだが、この方は雅楽に現代風解釈を交えての演奏が人気の東儀秀樹氏だとのこと。私の友人女性が彼のコンサートに行ったらしく、感想を尋ねたところ「寝た」とのことであつた。

それはさておき、少し前にも各社から新書が創刊されていたな、では、ちよつくら向学のため新書の装丁でも見比べてみるかと、思い至つたわけでありませう。

書店へ行き、とりあえず七冊の新書を購入。なお「装丁」とは本来は「製本の仕上装飾、すなわち表紙・見返し・扉などの体裁から製本材料の選択までを含めて、書物の形式面の調和美をつくり上げる技術。また、その意匠」(『広辞苑』より)を指すのだそうだ。よつて今回は新書の「カバーデザイン」のみを見比べようという試みなので、正確な意味では「装丁拝見」と

■新書の装丁を見る 批評 Design

はいえないのだが、カバーデザインがその書物の「装い」を「きた訂める」(＝装訂)最も顕著な部分であることは間違いないだろう。

まずは岩波新書。さすがに伝統と實禄が感じられる意匠である。一九三八年の創刊時のいわゆる「赤版」が、一九四九年に「書版」へと転じ一九七七年、青版から「黄版」へと再び装を改めている点特徴といえる。この三度装を改めた理由を以下に引用しよう。

「豊かにして勤い人間性に基づく文化の創出こそは、岩波新書が、その歩んできた同時代の現実にあつて一貫して希い、目標としてきたところである。今日、その希いは最も切実である。岩波新書が創刊五十年・刊行点数一千五百点という画期を迎えて、三たび装を改めたのは、この切実な希いと、新世紀につながる時代に対応したいとするわれわれの自覚とによる」(『岩波新書創刊五十年、新版の発足に際して』一九八八年一月)とあり、何やら「ははっ」と頭が下がるような気がしなくもないが、節目ごとに色を変えろというデザイン手法は、シリーズも

の装丁の方法論としては、単純な発想ではあるが、やり方次第で有効な結果が得られると感じる。

続いて深緑のカバーに白抜き文字が印象的な中公新書、岩波新書に近いデザインであるが、色がダークな分だけ地味ないイメージはある。装丁は渋谷区立松濤美術館をはじめ、数々の名建築を生み出した白井晟一氏の手によるものだそうである。日本的な美意識を有する稀有の建築家による装丁は、なるほど「中公的」な風格も兼ね備えており、なかなか存在感がある。「現代を真摯に行きよつとする読者に、真に知るに値する知識だけを選び出して提供すること」、これが中公新書最大の目標」（中公新書刊行のことば）一九六二年一月）だそうであるが、「新社」として生まれ変わった今後も、その初心は持ち続けてほしいと願わずにはいられない。

岩波、中公、どちらの新書も「現代社会に生きる」人々がターゲットであるという点では共通しているのだが、より具体的に新書名に「現代」を冠したのは講談社現代新書である。「創業以来民衆を対象とする啓蒙の仕事に専心してきた講談社」（野間省一）には、ぜひ今後とも幅広い刊行物でわれわれ民衆を啓蒙して頂きたいと思つのである。

現代新書の装丁者は今やグラフィックデザイン界の重鎮、神戸芸術工科大学で教鞭もとる杉浦康平氏に「+」というかたちで実質的なデザインワークを担当する（であろう）杉浦事

務所のデザイナー名がクレジットされる。以前の講談社新書はオーソドックスなデザインであったが、現代新書は各社新書で唯一、定型フォーマットに自由度があり、本の内容に合ったカラー印刷によるイラストなどが配置される点特徴である。創刊当初はタイトルも明朝系のおとなしめの書体を中心だったが、以後杉浦氏のデザイン傾向の変化と共に、新書のデザインも微妙な変化を繰り返している。季刊『銀花』のデザインをはじめ、自身の哲学的な造形論など、常に第一線で「他の追従を許さない」オーラを発している杉浦氏であるが、現代新書のデザインからもコンマミリのスキも許さない緊張感が感じられる。と同時に、クリーム色のカバーの地色や万人受けするイラストのレイアウトなど、親しみやすさでも出色なところが、現代新書のスゴイところであろう。

さて、比較的創刊時が新しい新書に移ろう。文春新書は岩波新書と中公新書を足して二で割ったような装丁で、どうもオリジナリティが乏しい。岩波、文春、中公で「赤・青・緑」が出揃った感がある。なんとという文春が重視するであろう「格式的」な雰囲気は見事に醸し出されてはいるのだが、もつちよい「冒険」してほしい気がする。装丁者は坂田政則氏、同じく文春の『少年A』「この子を生んで……」などの装丁をされている。

続いてちくま新書。これはどちらかというと上品で地味な傾向なのだが、筑摩書房の出版傾向にうまくマッチした装丁と感



文春新書



講談社現代新書



中公新書



岩波新書



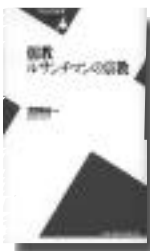
宝島社新書



PHP新書



集英社新書



平凡社新書



ちくま新書

じる。帯の下部に配したグリッドの構成、章扉などの使用書体に対するこだわり、色ベタ下部に配置された控えめな本文からの引用など、地味でいながら装丁者の主張が強く感じられる。丁寧な仕事といえよう。装丁は間村俊一氏。最近ではシンプルながら装丁意図が明確な『同時代論』（間宮陽介著・岩波書店）の仕事が個人的には印象に残っている。以前、詩人の佐々木幹郎氏が間村氏の仕事を指して「正体の明朝活字をレイアウトさせたら、この人の右に出るものはいないだろう」とコメントしていたことを思い出した。

平凡社新書は装丁界の御大、菊地信義氏の装丁である。氏の仕事量は鈴木成一氏と並んでとにかく多い。書店の平台で必ず見つけることができるので、興味ある方はぜひ探してみてください。作品集も多数刊行されています。

平凡社新書に関していえば、さすが御大、新書の傾向である「四角の色ベタ」をベースとするフォーマットは採用せず、赤い四角形の先っぽ（というか三角）が四方からちょこっと見えるデザインで、とても空間を感じさせる仕上がりとなっている。遠目には赤ではなく白の十字が目に入るデザインでもあり、なかなか面白い。ただカバー表一のタイトル・著者名位置のまっとうすぎる横組みや、背のゴシック書体など、若干いつもより色気に欠けるかな、という気がしなくもないが、これも新書シリーズの一貫性を考慮してのデザイン手法だろう。百冊とか

千冊揃った時点で、初めて御大の行う細心のデザインの配慮と深遠な哲学的思想が、より具体的に見えてくるのかも知れない。

最後は新入り、集英社新書である。装丁は原研哉氏による「玄人受けする」傾向。原氏は長野冬季オリンピックの公式プログラムをはじめ、数々のグラフィック作品を手掛ける、まさに今、飛ぶ鳥を落とす勢いのデザイナーである。自身のエッセイ集『ポスターを盗んでください』（新潮社）も出しており、諸々の氏の提案型デザインワークにおける方法論はまさに次代のデザイナー像を提示しているようでもあるのだが、装丁の仕事も多い。学生時代からの友人という原田宗典氏とのコラボレーションは有名であるし、他にも姫野カオルコ氏や柳美里氏の作品の装丁、朝日新聞社PR誌『一冊の本』のアートディレクションなど枚挙にいとまがない。そのどれもが「原研哉調」というか、「シンプル」という表現を用いると、ちょい乱暴なのだが、多くの人がシンプルなデザイン指向を持ち味としたデザイナーとして認識していると思う。

紙問屋の竹尾の見本帳デザインを担当している原氏だけあって、そのことが影響しているのかどうかは知らんが、多様な紙を装丁に用いており、その仕事は正直美しい。印刷に対するこだわりも相当なものだろう。集英社新書は他社の「白地に色ペタ」に対して「シルバー地に白ペタ」という発想の転換。そして「a pilot of wisdom」なる「ペー」と共に船を漕ぐ人の金色

のマークが入る。明朝体タテ組みの控えめなタイトルといい、うーん、上品、上品な仕事である。せひ原氏には某CM「上質を知る人」にも登場願いたいところだ。毎月の新刊時のインパクトにやや欠けるのではないかとという危惧もなくはないが、それも計算済みなのだろう、また随時斬新なデザインの「ページオンアップ」の工夫を投入してくるに違いない。この新書のデザインは、「ミック・実用書の集英社というイメージを覆す契機にもなり得る風格と哲学を兼ね備えている。器は十分である。あとは集英社が新書に「何を望むのか」が問われてこよう。私が新書の装丁についてあれこれいっていると、ある人が「自分の好きな本が多く揃っている新書の装丁が良く見える」と切り返してきたのが印象深い。

他にもビジネス新書的なイメージのあるPHP新書（装丁は吉本隆明の『アフリカの階段について』他多数の仕事がある芦澤泰偉氏）、デザインワークのツメは甘い、親しみやすさがある宝島社新書（デザインクレジットはReal Design STUDIO）など、比較的最近創刊された新書は多い。かつての河出新書や三笠新書他にも言及したかったのだが、次の機会にゆずりたい。

【日常雑感】 その二 川手直人

電車のなかとは、見方によれば現代社会の縮図とも考えられます。すなわち、公衆道徳とプライバシーイズムが常に臨戦状態にあるという意味においては、これは、社会的抽象としてのにんげん存在と、個としてのにんげん存在の位相の違いからくる齟齬とも表現できないでしょうか。

顕著な現象としては、古くはウォークマン、最近では携帯電話があります。これらは、いずれも、プライバシーイズムが、ツールの発明によって部屋を飛びだし、公共空間に入り込んだ結果に招かれた事態です（携帯電話の使用価値とはプライバシーイズムだけではありませんが）。プライバシーイズムが追及されてきた過程にはさまざまな要因があると思われるのですが、道具の端末化、複合機能化、多品種少量化などの点において、ポストモダン時代の企業の生産論理と相性が良いのは確かでしょう。他方、日本が近代化のなかで独自に追及してきた「個の自立」が、こうした企業論

理に影響しているとも考えられます。山崎正和氏はかつてこの両者の関係を「やわらかい個人主義の誕生」ということは積極的に評価しました。筆者はこの意見に批判的な立場ですが、しかし、見解には批判的であっても、省みれば生活のなかで道具を使うということによってその企業倫理なり、「個の自立」なりを自身が受け入れていることは事実です。ウォークマンの音漏れや携帯電話の「着メロ」や会話にしかめ面をしながらも、結局は我慢してしまふ大多数のひとつとは、自らの生活

が、こうした「個の自立」を具現した道具の恩恵を受けなければ成り立たないことをしゅうばんに承知している、せざるを得ないという心情をもっています。携帯電話に至っては究極的において、それを電車のよつな密閉された公共空間で利用して良いか悪いかというのは個々人の価値観・道徳観に帰してしまいます。公共空間において、生の会話と、電話を通じての会話が本質的にどのように違うかということは難しい問いです。しかし、携帯電話への不快感とは、携帯電話ないし会話そのものにあるのではなく、プライバシーイズムが公共空間に剥き出しに晒されることへの不

快感なのではないかと考えられます。それは銭湯や温泉での「はだかのつきあい」とは明らかに異なるものです。

ここに至って、プライバシーイズムの側面のみならず、果たして公共空間、それも電車のような密閉されたとは一体どのようなものなのか、にんげんはどこでどのような振舞いをするのか、ということが併せて検討されなくてはならなくなります。一口でいって電車とは、不特定多数のにんげんが「乗客」という抽象存在として位置づけられる空間ですが、そこで、個々人がどんな「乗客」として振る舞うかは、個々人が「抽象存在」をどう位置づけているかによって違つて考えられます。

時代は「身勝手な若者」が、大音量でウォークマンを聴いているというだけでなく、ひとつとが普段のままに、プライバシーイズムを公共空間で展開する局面に至りました。それにしても、ひとつとは本当にそこまでしてコミュニケーションしたいと欲求しているのでしょうか？

批評アングル

皆様いかがお過ごしでしょうか。これを書いている現在は、年末進行で忙殺されている編集室ですが、眼目をこすりつつ、『Nishi』八号に対してお寄せいただいたお葉書をご紹介いたします。

まずは「特集」東京の考現学（第一回）に対するお便りです。

大変面白く読みました。次号は何月でしょうか。地方も取り上げていただければと思いますが無理でしょうね。都市の匂いからはじめから終わりまでいたします。「考現学」の眼は地方には向けられませんでしょうか？

「北九州市・後藤みな子さん」

とりあえずは小社のある「東京」を取り上げたわけでして、機会あれば地方に関する調査も特集したいと思えます。もちろん考現学は都市のみを特権的に扱う試みではありません。身近な話題などございましたらお寄せ下さい。先日小社の社員某も、小倉へ営業につきがいましたよ。

特集・東京の考現学と称して荒川区の記事があったが、農のない都市は一種の砂漠だ。

二年前池袋で「農のある街づくり」連続講座を開講し大内力先生をはじめ農業者を講師にして色々勉強したが、六〇年代後半の悪法、新都市計画法は混在していた農を切り捨てたのだ。西山先生は知の広場を求めておられるが、ここはひとつ「農のある街づくり」を東京二三区内に求められたらどうか。臨海副都心に「農を」の意見もあるが、カネもつけだけの権力者にとっては都市農業なんか眼中にない。貴誌も東京の考現学を特集するなら「農のある街づくり」に取り組みはじめた北区のような事例から、もっと視点を広げて特集を組んでほしい。「豊島区・植村泰さん」

特集・東京の考現学、大変興味深く読みました。二三年前、目黒区の区政モニターをしました。区役所の役人は二三区比較を非常に気にしていて、職員一人当たりの区民税などの指標を上げるために、職員の削減が進

みました。目黒区の方が楽しみです。

「目黒区・蔵田隆之さん」

特集・東京の考現学、とてもおもしろく、数多くのデータを出しながら、しかし数字にまどわされない現場の実態をよく取材しているところがすばらしい。データではとても「住みにくい・暮らしにくい」という数字があるにもかかわらず、実際にそこに暮らす高齢者たちは「住み続けたい」と思う暮らしやすさ……。

静岡市で生まれ、約一五年間大阪・広島・神戸と転勤をし、現在のところに約十年暮らししてみて、しかも東京の足立区へ通勤している（二年前までは市ヶ谷）者としても興味のある特集である。東京二三区すべて楽しみにしています。「流山市・青島信一さん」

「狭い日本……」という表現がありますが、東京都ひとつとっても地域によって、環境から住民意識まで異なる部分が多いというのが現実ではないでしょうか。現在、東京都西多

摩都日の出町では、二ツ塚処分場の建設をめぐって住民を中心とするトラスト共有地による反対運動が展開されています。処分組合の無法性が特に問題になっているこのケースも、大部分の東京都民、特に都市部で生活する人々の関心事になり得ているとはいいいがたい状況が存在します。

いつもお送りいただいて、有難うございます。PR誌には、同時に頂いた目録に見る御社の歴史民俗学その他と、少し違った内容のような気がします。Modernologyも今(和次郎)先生の頃と違って、企業の生産する画一的な素材が横行する近頃は、面白い結果が出るはずありません。従って記事も今ひとつ視線を変えた方がいいのじゃないでしょうか。荒川区も、記事の限りでは面白いところにぶつかりそこなっているようです。

確かに新しい知識がどこかにあったり、求められたりしているでしょうが、はっきりと具体的に出示されていないので、どの方の文章もアイマイです。「棲み家」を求めるのではなくて、「舞台」を求めて下さい。棒ほど求めて針ほど叶うという意味です。今のままではNipponもサッチも行きません！

「川崎市・神谷量平さん」

おっしゃるとおりで、編集室としても企画の切り口その他で、色々と試行錯誤の状態というのが正直なところです。今後ともご意見などお待ちしております。

考現学に関しては、確かに今和次郎が調査を展開した戦後の時代とは、状況はかなり変わってきました。しかし、あくまで「現代」にその舞台を求めるのが考現学の特徴といえます。「企業の生産する画一的な素材が横行している状況には、確かに小生もつんざりしていますが、その素材を使うのは、やはり我々人間です。少し前、ネコが近付かないように水を入れたペットボトルを庭先に並べるのが流行ったように、まだまだ人間のとる行動は未知数のように感じます(それは怖くもあり、楽しみでもありますが)。

(前号の)「生活風景の標本づくり」が面白かった。生活の周辺を「大学でのフィールドワークを通して」、眺めてみる。私が毎朝続けている健康法としての散歩(ジョギングでなく、ゆっくりウォーキング。時々立ち止まって思考)にあてはめ、続けてみている。

お墓の形態しらべの小平霊園の墓地調査の失敗、藪蚊に襲われての思い出が出たが、私が住む町内会で墓地管理委員をしていた時にも、藪蚊や供華ものの腐敗のにおいに退散

したこともある。江戸時代から続いている墓の中の先祖たちの眠りをかきむしるような行動も結局は無縁墓地探しに終わり、それらをまた転売する墓地管理の現実と世相を考えさせられたのであった。これは私の思い出。「草津市・久保和友さん」

『Niche』第八号を今回送付していただき、





初めて拝見しました。

小生、他にも数社出版社などのPR誌を購読していますが、これらのPR誌とは全く違い、新しい視点・角度で編集されており、大変興味を覚え楽しく読ませてもらいました。一つのテーマを多角的に取り上げているところがユニークなPR誌です。これ自体一つの読み物となっていて有効であると思いまし

た。長く継続発行されていくことを心から望みます。「豊橋市・市川昇さん」

ありがとうございます。『NIPPON』が大手出版社のPR誌と異なる点は、発行が予定日より常に遅れてしまう点です(スママセン!)。「継続発行を望む」とのことですが、これが

はつきり申し上げて、小社のような弱小版元にとつては最も大変なことです。しかしながら、読者の皆様とのコミュニケーション媒体となるべく、今後はぜひ継続発行をしたいと考えております。

ではここで、小社刊行物についてお寄せいただいたご意見を少々ご紹介したく思います。九九年二月刊行の鳥成郎著『ブント私史』には、大きな反響がありました。長いお手紙をお寄せ下さる方も多いのですが、ここでは二枚のお葉書をご紹介したく思います。

六十才定年退職し、現在失業保険で生活中。四十年振りに友人より贈られ、読書をした感じがして、感謝、感激。正に「凝縮された日々」に参加出来たことは私の喜びと誇りであり、現在までの「心の拠」でありました。

関係者の方々はその後、もの見事に人生を全う(亡くなられた方も含み)しているのを見るにつけ、四十年只酒を飲み続けている自分を再認識すると共に、シヨックを受け

ました。貴社の存在(今の時代において)自体に敬意を表し、且つ驚きをかくせない。社員の方は、やはりその筋の関係者なのでしょうが? 頑張ってください。

「大宮市・高橋恒央さん」

涙しながら読みました。一九六〇年、私は早稲田大学第一文学部四年。安保には *segregation* いや傍観者に近い状態でした。そのことが私の心底に常に「負の遺産」として残っていて、ブント全学連の行動に身を投入し「生」を賭けなかったことが、今日でも心の痛みとなり棘となっています。

一九七二年、あさま山荘のON AIR後にぶつ倒れ、そこから死の淵を歩きながら自分の過去を洗い直す作業を始めました。当時、私には未来はありませんでした。そして行きついたので、青春の一時期真剣に考えたブントでした。この本は泣きながら読みました。出版と同時に買ったのに、やっと読み終えることができました。「浦安市・横山貞利さん」

小社二〇〇〇年一月の新刊として、三上治著『いま、戦争について考えることの一つとして』が予定されています。六〇年安保から全共闘まで、ブント再建と学生運動に挺身した稀有の思想家で、吉本隆明氏との思想交流

などを通じて、時代の先駆者でもあり続けた三上治氏の評論集です。加藤典洋氏の『敗戦後論』、小林よしのり氏の『戦争論』などに對する論考も含まれています。ご期待下さい。なお三上氏の新刊は二月にも、島成郎著『ブント私史』の第二弾ともいふべき、一九六〇年代論「精神の闇屋へ」（仮題）が小社刊で予定されています。

『歴史民俗学』第十三、十四号での「ゾルゲ事件」について私は良く知らないのですが、以前NHK教育のETV特集でゾルゲチームと呼ばれるロシアのスパイが日本にいて、その内の一人でユーゴスラビア人のフランス・ソルボンヌ大学出身の、表向きはフランスの雑誌記者という人物と結婚をした日本人女性が、その番組内で回顧録のように話をしていたのを見た記憶があります。

そのユーゴスラビア人は（名前が思い出せないのですが）太平洋戦争の終わり頃に逮捕され、北海道の網走刑務所内で凍死したというのでした。その奥さんが当時未開の原野がまだ広がる網走へ、遺体を引き取りに行くと語っていました。私の全然知らない所で、すごいことが世の中では起こっているのだと思います。

この手の話は全てが解説されることはない

のでしようが、世の中、人間のやる事は決して整理整頓されていないと、ものすごい業のようなものがあるんだと、日々肝に銘じて生きている方が健全だなど、私は考えています。「豊川市・頼本雅司さん」

『歴史民俗学』第十五号「偽書の日本史」さつそく拝見。まず、装丁がいいですね。武功夜話の原稿に永仁の筆、なかなか凝っていて面白い。内容も興味深く、一晩中かけて読みました。

武功夜話は第一巻を求めて読んだ時、面白いので二巻以下は買いませんでした。その後『武功夜話の世界』が出たので求めましたが、その一番初めの「墨俣一夜城はこうして作られた」（今川徳三）が今回の歴史民俗学で取り上げられ、偽書であることが分かり、古書に限らず採用する場合の難しさを痛感いたしました。武功夜話を偽書として検証された勝村公さんの御努力に敬意を表します。

原田実さんの「土俗的なもののパラドックス」は東日流外三郡誌の偽書たる所以を唱えてきた総括というが、東北の人々の田舎的というが土俗的なあこがれを巧みに利用した故和田喜八郎氏の作成したものであることを結論づけた、彼の物怖じしない態度に好感が持てました。「日野市・田中紀子さん」

『歴史民俗学』第十三、十四号に掲載された「ゾルゲ事件の真相」（渡部富哉氏）への反響も大きかったのですが、最新刊第十五号の巻頭論文「偽書『武功夜話』と贋系図」前野氏系図の検証」（勝村公氏）も、現在各方面で様々な波紋を巻き起こしており、執筆者宅にまでいやがらせの電話があるような状態です。追って新聞など各方面のメディアでこの特集に関する報道が行われる予定です。今後の展開にご注目下さい。

『絵馬に見る民衆の祈りとかたち』拝読いたしました。二宮神社の恒例新年の絵馬展に出品しておりますが、来年のために何を描こうかと悩んでおりました時この本を読みました。絵馬を奉納する意味と移り変わりを深く知らずに描いていた時と、考えながら描く絵馬とは気持ちが変わります。来年の絵馬展の作品はひと味違うゾと、我ながらホクホクしております。どうもありがとうございます。「茅ヶ崎市・大木純子さん」

神奈川県小田原市の神社に奉納された絵馬の銘文を徹底調査した『絵馬に見る民衆の祈りとかたち』は、全国の図書館などを中心にご好評を頂いております。特別付録として併

載された、二〇〇ページを超える「浮浪はくわう」(ル・はくれ)と「宿縁めくり」関係文献目録も、研究者・一般の別を問わず有効活用していただけだからと思います。

(小社刊『下等百科辞典』に対して) 常にあるように、まさに珍書中の珍書。医者稼業の当方には、まず最初の項目 医院師 から興味をかきたてられた。それにしても、上下二枚のみが本物の玩弄紙幣が詐欺師の隠語で 医者 とは！

疑問を少し。なぜ「あ之部」や「さ之部」などがないのでしょうか。例えば、「サワ師(サワ之部参照)」とありますが、肝心の「さ之部」がないようです。元々ないのでしょうか。

九九年五月刊行の『下等百科辞典』には小社の予想を上回る反響がありました。新潮社『サライ』誌上で住友和子さんが「拾い読みするだけでも目からウロコの話が飛び込んでくる、第一級の生活史料」と好意的な書評を下さったり、京都の三月書房さんを始め、全国の書店さんにも販売的なご協力を頂戴したりしました。初出は明治四三年から大正七年までの『法律新聞』ですが、ご指摘の「さ之部」などは連載時にも存在せず、その理由

は不明です。すべての項目が網羅されていないことは、本当に心残りではあるのですが……

(小社刊『雑学の冒険』に対して) 民俗学を研究したいというちょっとした興味から、もっと勉強したい！ という思いに変わりました。友達とこれからも、もっと少し深い所まで研究していこうと思っています。

「南河内郡・田中裕子さん」

まず驚いたのが、出版社のPR誌になぜ「ニッチ・棲み家を求めて」なのか？ 批評社は建築関係の出版が多いのか。もっとも末尾の編集室から読んで氷解しましたが。

「江南市・山崎真臣さん」

残書お見舞い申し上げます。秋へ向けて頑張ってください。応援していマスー！

「北海道上磯郡・林洋一さん」

第十号の発行は秋どころか冬になってしまいました……。何から何まで手作りの『Niche』故にご容赦の程。また、小社刊行物に對しましては、理論的展開が少なくものたりなかつた」「新宿区・藤本茂男さん」ほか、敵しいご意見も多数頂戴いたしております。これらはにすべて眼を通し、時には著者も交えて内容の再考を徹底しております。どこが「ものたりなかつた」のか、詳しいお叱りなど頂ければ幸いです。



メンタルヘルス・ライブラリー 1
いじめ

子ども不幸 という時代

河合洋編



社会病理ともいうべきいじめ いじめ現象。その背後に潜む、青年期の衝動殺人、自殺願望、暴発する犯罪……。陰鬱な攻撃性の深層心理を、精神科医療の現場から捉えた迫真のレポート。河合洋＋芹沢俊介＋安松輝子の対談、子ども不幸という時代を考える。他、豪華執筆陣による新シリーズ第一巻。

A5並製 1800円

メンタルヘルス・ライブラリー 2
精神分裂病の謎に挑む

森山公夫編



「早発性痴呆 精神分裂病」概念は、クレベリンの精神医学体系の成立以来、約百年にわたって患者を、そして治療者を社会防衛的な管理と収容システムの中に支配し続けてきた。ノーマライゼーションの時代といわれる今日、精神分裂病の病因論、治療論など疾病概念全体の脱構築をめざして、分裂病の謎に挑む！

A5並製 2000円

絵馬に見る
民衆の祈りとかたち

特別付録「浮浪」と「宿縁」関係文献目録
西海賢二



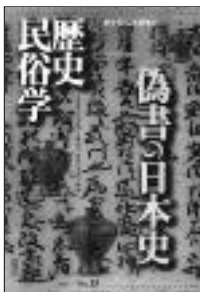
「苦しい時の神頼み」。我々は困った時に、身近な神や仏に救いを求める。そんな日本人の現世利益的な民俗宗教の特色を象徴する「絵馬」。民間信仰に対する人々の心意を、絵馬の図柄／銘文を調査することにより跡付け、時代を超えた人々の「祈りのかたち」を解き明かす！「浮浪」と「宿縁」関係文献目録付き。

A5並製 3200円

「特集」偽書の日本史

歴史民俗学 15号

歴史民俗学研究会編



偽文書、偽書、偽作……。日本史には多くの「剽窃」「盗作」が潜んでいる。世紀末を迎えた現在、知られざる様々な偽史運動に光をあて、その恐ろげき病理を解読する総力特集。戦国史を語る一級資料「武功夜話」は昭和三十年代に作られた偽書であった！「偽書・武功夜話」と「贗系図・前野氏系図」の検証。他。

A5並製 1300円

精神医療17号
「特集」コミュニティと障害文化

精神医療編集委員会編

障害と共生する地域文化の創造とは？座談会・障害文化の周辺／精神科休日・夜間相談センターおかやまの経験から、精神科医療懇話会報告他。

B5並製 1700円

「特集」考古学の冒険

歴史民俗学 14号

歴史民俗学研究会編

「不変」という幻想の下にあるものが、いかに歴史的に形作られたものかを明らかにするために……。考古学に多角的に迫る！

A5並製 2000円

連載「コラムも充実」

法窓秘聞

尾佐竹猛 / 磯川全次 解題



判事として長く法曹界に身を置いていた尾佐竹が、ウンチクを傾けた犯罪・司法にかかわる秘話、秘録。記述は国定忠治の判決、幕末の外国襲撃からマリアルズ号事件にまで及ぶ。山田風太郎の『明治小説全集』諸作品他、多くの文筆家がタネ本として使用してきた、明治政治裁判史の第一級資料！

四六上製函入
3800円

明治四年賤称廃止布告の研究

尾佐竹猛 / 磯川全次 解題



江戸時代の被差別民支配の象徴「弾左衛門」支配の崩壊と相まった、明治四年の明治維新政府による「賤称廃止布告」を、維新史の大家・尾佐竹猛の先駆的研究に学ぶ。入手困難な諸論文は、今日なお新鮮な発想と視点を大胆に提示する。「穢多非人の称号廃止に就いて」「特殊部落の呼称廃止」抄、他。

四六上製
2000円

又鬼と山窩

後藤興善

柳田國男と共に日本民俗学の先駆的研究者である、後藤興善の名著。サンカ・マガギ研究には不可欠の貴重な文献である。待望の重版出来。

四六上製函入
3800円

文化生態学入門

西山賢一



私たちの家族や企業、自治体や国家、そして基層文化は「淘汰圧」(選択圧ともいい、外から生物にかかってくる圧力)によって生存のための新たな適応戦略が求められている。複雑系をキーワードに、進化と適応の生態学をおして、転換期の風景を解説する六八個の適応戦略。大幅増補の改訂新装版発売！

四六上製
2400円

好評既刊

文化生態学の冒険

ヒト社会の進化と適応のネットワーク

西山賢一

地球上に生物が誕生したのは三五億年前、人類の誕生は四万年前…。この時間空間を生きのびた人間なる生物が織りなす多様な文化生態系を解説する。

A5変形並製
2330円

ニッチを求めて

文化生態系の適応戦略

西山賢一

人類は地球上に棲息する他の生物とどのように相違し、また同質な存在であるのか？ 朝日新聞/毎日新聞好評のロングセラー！

四六並製
1845円

沈黙する教師たち

戦後教育の検証・別巻 2

学校危機の中の教師像

柿沼昌芳 + 永野恒雄 編

学校崩壊が声高に叫ばれ、プロ教師を自認する教師の内部告発が教育現場を支配する中で、多くの教師は口を閉ざしている。学校の実態に迫る！

A5並製
1600円

精神医療16号

「特集」痴呆性高齢者の「こころと暮らし」

精神医療編集委員会編



「痴呆症」という言葉が一人歩きをしている現在、痴呆性高齢者のこころと暮らし、権利の保障について考える。座談会・痴呆性高齢者は癒されているか？（石橋典子＋大熊一夫＋小澤勲＋浅野弘毅）／痴呆という生き方／痴呆高齢者の介護と医療の役割について／縛りすぎだぞ！ニッポン／高齢者の権利擁護／他。

B5並製 1700円

精神医療レポート

エルンスト・クレイノ
山本慶夫＋山崎信之＋山田忠彰共訳



強制投薬・電気ショック・閉鎖病棟 精神医療の現実を、精神病院史上初めて患者自身が語り、批判した。それは差別と偏見の中で人間の尊厳を踏みじられた人々の貴重な告発のドキュメントである。全ヨーロッパを震撼させた衝撃のレポート！ 数字が語る精神医療の悲惨、他。

四六上製 2678円

第三帝国と安楽死

生きるに値しない生命の抹殺

エルンスト・クレイノ／松下正明監訳

第二次世界大戦中、ナチス・ドイツによって行われた「安楽死」という名目による精神障害者への迫害を鋭く告発する原典。待望の邦訳！

A5上製 8500円

明治秘史 疑獄難獄

尾佐竹猛／礪川全次解題



法学博士、尾佐竹猛の代表的な稀覯本、待望の覆刻。明治元年の近藤勇の処刑から明治二四年の大津事件まで、明治初年から明治中期にいたる著名な九つの事件を、史実に沿って解説。大津事件を解説した第九篇は現在岩波文庫に収められているが、全文の覆刻は半世紀ぶり。

四六上製函入 5700円

法曹珍話 閻魔帳

尾佐竹猛／礪川全次解題



尾佐竹が「無用学博士」なるペンネームで刊行した珍本。表題作他「珍書珍物過去帳」「掏摸（スリ）物語」「犬いろい」など五篇からなる。全編が秘話珍話で埋め尽くされているが、特に明治期の政官界の暗部に触れている点が重要。一九二六年の刊行以来、実に七三年ぶりの覆刻。

四六上製函入 3800円

下等百科辞典

尾佐竹猛／礪川全次校訂・解題

イロ八順に各項目を詳しく解説した、明治、大正期の犯罪・民俗・風俗・世相を扶る珍籍隠語辞典。『法律新聞』の初出以来、初単行本化！

四六上製函入 3800円

『アラハバキ
幻想の荒覇吐秘史』

原田実



『東日流外三郡誌』の迷宮

原田実



『若衆篇』
江戸男色考

柴山肇

歴史偽造は許されない！和田家文書の真贋論争に代表される偽史運動の恐怖を鋭く告発する。『東日流外三郡誌』をめぐると偽作・剽窃・盗作の病理を暴き、オウム真理教問題にも言及。『東日流外三郡誌』真贋論争の倒錯／古田武彦氏は超能力者か／幻の和田家文書映画／『地球ロマン』『迷宮』の時代／他。

四六並製
2400円

四六並製
2670円

四六上製
2500円

ちよつとミステリー
砂糖と塩のミックスマイストリートショート集
サトウ・トシオ



キャバリア

キング・チャールズ・スパニエルズ
この愛すべき友人たち

ジョン・エバンス／坂井由紀訳



鉄路のデザイン
ゲージの中の鉄道史

升田嘉夫

ヒトはちよつとしたポタンの掛け違いから、思わぬ行動をとることがある。ヒトの心の裏に隠された不条理の深層心理を巧みに描いた抱腹絶倒三八話のしょと・ミステリー！
托卵する女／ラジオ電話相談室／幽霊のいない幽霊屋敷／怖いもの見たさ／トリック絵画／誇大妄想病の男／特急「南紀」殺人旅行／他。

四六並製
971円

A5上製
2400円

四六上製
2500円